二本松城の歴史

二本松城の歴史は日本の近代への変遷の歴史です。市を見晴らす高台から、この城は戦国時代（1467～1568）の激しい争いが落ち着き、徳川幕府（1603～1868）の長い平和が訪れ、やがてそれが戊辰戦争によって終結して近代国家への道を歩み出したのを見てきました。

山の要塞

二本松城の最初の姿は 1414 年に完成しました。この城は地元の大名、畠山満泰によって建てられました；畠山満泰の一族はその 1 世紀前に足利幕府の国代としてこの地域に派遣されていました。満泰の城は山の頂上部のみを占めており、快適さよりも防御を優先して、石ではなく固められた土の壁で守られていました。

畠山氏は 1 世紀以上にわたってこの城に住んでいましたが、1586 年に北方の強力な大名である伊達政宗によって追放されました。伊達家と畠山家の間では長い間対立がくすぶっていましたが、政宗の父が畠山家による誘拐未遂中に死亡したことで緊張は頂点に達しました。畠山氏は敗北が避けられないと認識し、城に火を放ちながら逃亡しました。

城を近代化する

1590 年、当時日本で最も強力な大名であり、全国を統治しようとしていた豊臣秀吉は、二本松城を大名の蒲生氏郷に割り当てました。氏郷は城の近代化に着手し、本丸の周囲に最初の石垣を築きました。

秀吉の死後、徳川家康は 1868 年まで日本を統治した幕府を設立しました。1627 年、幕府は二本松城を大名加藤家に割り当てると、加藤氏は氏郷の事業を引き継いで、斜面の下方に三の丸を囲む石垣を築きました。

丹羽氏以降

1643 年、徳川幕府は二本松を独立藩として宣言し、丹羽光重を初代大名に任命しました。光重は任命されると、城壁の外の町をより秩序ある区画に作り直すことに取り掛かりました。城下町の基本的な配置は、現在の二本松市に残されています。徳川の時代はおおむね平和で、光重とその子孫は 2 世紀以上にわたってこの城から二本松を統治しました。

1868 年、西日本の有力な藩が率いる同盟が、戊辰戦争と呼ばれる戦いを起こし、幕府に対して武器をとりました。二本松は幕府側として参戦しましたが、西側同盟の近代兵器と戦術の前には無力でした。二本松藩は制圧され、二本松城は再び火を放たれました。

幕府の敗北後、明治新政府によって藩と大名は廃止されました。二本松城のかつての敷地は製糸工場が占有し、その後公共公園となりました。20 世紀後半に発掘と修復の取り組みが始まるまで、城の一部は半分埋もれた石垣いくつかを除いてほとんど残っていませんでした。城の歴史がどのように二本松の街を形作ったかについては、今も明らかになり続けています。